

ヨハネスブルグ日本人学校における国際理解教育の実践

前ヨハネスブルグ日本人学校 教諭

北海道北見市立美山小学校 教諭 大垣 正紀

キーワード：国際理解教育、現地教育施設交流、ソウエト地区、アパルトヘイト

1. はじめに

在外派遣教員として平成26年4月にヨハネスブルグ日本人学校に着任した。ヨハネスブルグ郊外のORタンボ国際空港（ORタンボとは、アパルトヘイト時代にネルソン・マンデラ氏とともに闘争の英雄であるオリバー・タンボ氏の名前）に、当時の校長先生や職員の方々が日本と南アフリカの国旗を振って出迎えていただいたときの光景は、今でも目に焼き付いている。当地での3年間の指導実践について報告する。

2. 日本人学校の教育

日本人学校の保護者の多くは、日本とは大きく異なる海外の環境の中で、教育のあり方に関して非常に高い関心を示している。しかも、塾や進学教室などが無い学習環境の中で、いかにして学力の向上を図るのか等、学校に対する期待は非常に大きい。

ヨハネスブルグ日本人学校では文科省が示している小中学校の標準授業時数よりも多く時数を配当している総合的な学習の時間等で現地理解や国際理解教育に視点を当てるとともに、コミュニケーションのための「英会話（EC）」を実施し、英語圏にある日本人学校として保護者の要望にもかなうよう英語力の向上に努力している。また文科省の提唱している「英語が使える日本人の育成」を重視し、小学校から英会話を取り入れ、このことを通して現地との交流を深めるなど実践化も図ってきた。

文部科学省や外務省及び日本の企業各社は、海外においても日本国内の義務教育に相当する教育を学齢期の子供たちに受けさせるため、日本人学校や補習授業校等で学んでいる児童生徒を支援している。なぜなら在外教育施設は、海外という日本とは異なる環境の中で設置されているので、当然のことながら国際性を培うことが期待されているからである。

それはその国の言語によるコミュニケーション能力があることや、異なる文化や習慣等に柔軟に対応できること、あるいは、人種、民族に対する差別や先入観を持たないで互いに協力できること等である。ヨハネスブルグ日本人学校では、日本の義務教育を前提に、確かな学力を身につけることと国際性の涵養については教育の目的の一つであり取り組むべき課題の一つと押さえている。

3. 交流学習の意義

日本人学校に通う子供たちが南アフリカにいて南アフリカを知らず、南アフリカの子供と交流することもなくヨハネスブルグ日本人学校での教育体験を終えてしまったら、それは現地理解教育、国際理解教育を実践したことにはならない。

日本人学校では、現地教育機関や施設等との交流を図ってきた（交流学習）。3年間、現地小中学校の他、幼稚園は高等学校そして孤児院や介護老人施設等含め、幅広い年齢層との交流を図りながら、現地理解力及びコミュニケーション力の育成を図ってきた。

「国際理解教育を通しての、国際感覚・人権意識の醸成」及び「コミュニケーション能力の育成」は極めて大きな意義がある。その中で、現地の子供と接する機会を通じて、南アフリカ共和国を理解する貴重な機会と捉えている。

常に子供たちの安全管理を念頭に置きながらも、在外教育施設としての特色や小規模・少人数という特色を生か

し、何をすべきか・何ができるかを派遣教員一丸となって智恵を出し合い、保護者の要求を受けとめながら、教育の本質を忘れることなく、海外で暮らす子供たちのための教育指導を実践していくべきであると考えた。

4. オランダ孤児院との交流学習

ソウェト地区にある、Orlando（オランダ）孤児院との関わりは、日本人学校として大変意義深い教育活動であった。このオランダ孤児院と日本人学校は10年以上の交流を続けている。

平成28年度、ヨハネスブルグ日本人学校は創立50周年の佳節を迎えた。平成28年9月24日（土）には50周年式典記念行事が挙行された。当日の来賓の中には孤児院の院長であるソラニ・ミリアム・マジブコ院長もいらした。

孤児院のあるSoweto（ソウェト）地区は、アパルトヘイト時代に白人により黒人隔離政策地域として区画された地域である。地名の由来は、“South Western Townships”の短縮名であり、迫害されたアフリカ系住民の象徴の地でもある。

孤児院は1940年に設立され、1歳未満から15歳以上の子供たちが常時50名以上、多いときには100名近く生活している。この孤児院で生活する子供の、85%親が育児放棄、15%は親がエイズ等で亡くなった子供たちである。この現実だけを捉えると悲観的になりがちだが、実際に子供たちとふれあう中で見られる目の輝きや喜びを体いっぱい表現する姿に私自身が励まされ、この子供たちのこれからの幸せを願わずにはいられない気持ちになった。

私は交流学習や職員研修も含めて6回訪問させていただいたが、マジブコ院長はいつも笑顔で出迎えてくれた。施設はとても近代的である。一部施設の壁には日本の現代美術家である日比野克彦氏が孤児院描いた壁画があり訪れる度に目を奪われた。

交流内容は低学年UNITと高学年UNITに分かれて行う。日本人学校の子供たちは折り紙やお手玉、福笑いにカルタなど手作りで準備したものを紹介しながら交流した。

時には趣向を凝らして「運動会」を行った。この国に競技としてのスポーツ大会はあるが日本的な運動会はない。玉入れ、綱引き、二人三脚など、この国の子供たちにとっては初めて経験するものばかりである。慣れない動作に戸惑いながらも次第にヒートアップし始め、日本の子供たち以上に盛り上がる様子が見られた。勝つとバック転をするなど体全身で喜びを表現し、負けると悔しくて勝つまで続けるオランダの子供たちであった。最後は毎年、日本人学校の子どもたちによる「ヨハネスソーラン」を披露した。最初は静かに見ていたオランダの子供たちも、やがて踊りたくてそわそわし始めた。‘Let’s dance together!’と呼びかけると一斉に飛び出す子供たちである。その中で、日本人学校の子供たちが教えてあげる光景からも交流学習の意義を感じた。

そして交流学習はそれでは終わらなかった。踊りへの御礼として、オランダの子供たちが現地のダンスを披露してくれた。手拍子をしながら床を踏みリズムカルに踊る様子は、さすがとしか言いようがないくらい素晴らしいものであった。私自身、オランダの子供たちとの出会いは決して忘れることはないだろう。

5. 交流学習の振り返り

多種多様な世代との交流する中で、子供たちは言葉が通じず戸惑う様子も見られたが「遊び」という最大のコミュニケーションツールを用いて積極的に関わることができた。そのがんばりに応えるかのように、関わった現地の人々も目を輝かせながら施設内を連れまわったり、遊びを教えてくれたりとしてよりよい関わりを築くことができたと思う。

交流後の振り返りでは「自分から寄り添うことができたか」と「交流相手はどんな場面で笑顔を見せてくれたか」の2つの視点にそって話し合った。「どんなときに交流相手は笑顔になってくれましたか」の質問に、このように笑顔の花がいっぱい咲いていた。その中で1人の子供の、「自分が笑顔でいれば、相手も笑顔になってくれた」という気付きに注目した。実は、この子が大切にされた態度こそ、もっとも相手を笑顔にさせるための1つの

秘訣であることを仲間に伝えた。さらに、これは普段の生活の中で友達との関わりにおいても大事にしたいことである。このように、交流学习を繰り返すごとに、よりよい関わりに気付くことができるようになった子供である。

日本人学校の子供たちは週4時間、現地採用教員による英会話の授業を通して語学力を身に付けてはいるが、交流先で互いに笑顔で寄り添える資質がこの交流学习では何より大切である。

異なった学年や生活環境にいる子供たちと交流をしてきた。子供たちは、肌の色、髪の毛の色、言葉の壁があったとしても、笑顔になる理由に違いはないということを理解し、よりよく関われることを知った。ここで学んだことをこれからの生活の中で生かしながら、自分を、そして仲間を大切にできるようになってもらいたい。

6. アパルトヘイトを学ぶ 小学部4年社会科：郷土の歴史 道徳：国際理解・国際貢献

南アフリカでは4月27日はFreedom dayとして祝日である。理由は、アパルトヘイト制度が終焉し1994年4月27日、全民族参加による民主的な選挙が実施され、ネルソン・マンデラが率いる政党ANC（African National Congress：アフリカ民族会議）が第1党となって、マンデラ氏が大統領に就任し、新生南アフリカ共和国の政府が誕生した記念日だからである。

アパルトヘイトの歴史を学ぶ施設はこのヨハネスブルグ市内にも多く点在している。治安の関係上全てを周ることは難しいが、「アパルトヘイトミュージアム」や「ヘクターピーターソンミュージアム」などは、観光ツアーも組まれており比較的訪れやすい場所である。この2つの施設については職員で校外研修として数回訪れている。

また、ヨハネスブルグ日本人学校では南アフリカを学ぶことを目的とした副読本「大地から学ぶ」を発刊している。これまで歴代教員により改定されてきたが、平成28年度、日本人学校が創立50周年を迎えるにあたり10年ぶりに改定を行った。ここには南アフリカの自然から歴史、産業、そして文化等全てが網羅されており教科指導計画にも位置付けて教科指導に活用している。そこで4年生・社会科学習「地域の歴史にふれよう」の一環として、この副読本を活用しアパルトヘイトについての学習をした。4年生としてはやや難しい内容であったが、前段でも述べたように、南アフリカで生活する子供たちが南アフリカのことを知らないのでは現地理解教育を実践したことにはならないと考え指導に努めた。

(1) 学習の流れ

- ①南アフリカのイメージを考える
 - ・都会 ・黒い ・動物が多い ・険しい山 ・暗い ・危なそう
- ②アパルトヘイトのイメージを考える
 - ・人種隔離政策 ・アパルトヘイトミュージアムに行った ・白人がいばっていた時代
 - ・白人と黒人を差別した
- ③アパルトヘイトを学ぶ
 - 日本人学校作成の現地理解副読本「大地から学ぶ」を読む
- ④黒人と白人の立場からアパルトヘイトを捉える
- ⑤マンデラ大統領の思いや願いを学ぶ
- ⑥アパルトヘイトに対する自分なりの考えをまとめる

本校が50周年を迎えるにあたり、今から30年以上前に在籍されていた方々をお迎えして講演会をしたときも、「その頃は、エレクトリックフェンスもなく、隣の公園まで歩いて行ってザリガニ捕りをしていた」との話に子供たちは驚いていた。

白人視点から捉えると、アパルトヘイトも決して悪いことではないとなった。そこで、次に黒人視点から考え

ることにしてソウェト（アパルトヘイト政策によって迫害されたアフリカ系住民の象徴の地）についての映像や、ソウェト蜂起（1976年6月16日、学校におけるアフリカンス語教育の導入に反発しアフリカ系学生を中心に抗議デモを行ったが、警官隊による鎮圧で当時13歳のヘクター・ピーターソンを含む多くの学生が死亡した。アパルトヘイトへの反発が国内のみならず世界に広がると同時に、ソウェトの名も一躍世界に知れ渡ることとなった出来事）についての資料を読み深めた。

(2) 子供の思考

- ・これから、この国が黒人や白人関係なく話し過ごせる平和な国になると思うと嬉しかったらな。マンデラさんは、この国を「虹の国」と言っていたが、虹にはいろいろな色がある。きっと「肌の色は関係なく一緒にいれる」と考えたのだと思う。
- ・黒人と白人は一緒に関わり合える。明るい国にしようと「虹の国」と呼びかけた。自分が絶対平和な国づくりをするぞという強い意志が伝わってくる。
- ・雨の日がやっと晴れて虹がでた。国民の気持ちが良く伝わった。
- ・アパルトヘイトが撤廃されて、みんなが平等でなくてはいけない。
- ・アパルトヘイトがなくなって、みんなが自由に暮らせる楽園を作りたい。悪いことが良いことになってほしい。
- ・いろいろなことを乗り越えて平和をもたらす国ということから「虹の国」と呼んだのだと思います

現地の友人の中には「アパルトヘイト時代の方が安全で暮らしやすかった。」と言う人もいる。アパルトヘイトが撤廃されて20年以上が経過し、BRICS（2000年代以降著しい経済発展を遂げている新興国の総称）としても発展を続けているこの国がマンデラ大統領の目指した国に向かっているのかどうか見守り続けていきたい。

7. おわりに

3年間の派遣期間を終え、この国の良さを多く実感できたこと嬉しく感じる。日本人や南アフリカ人および多種多様な人々との関わりから多くのことを学ぶことができた。この国で出会えた全ての人々に感謝をしたい。

これからは在外での研鑽を生かし尽力していきたい。そして遠く日本から南アフリカの発展とそこに暮らす全ての人々の幸せを切に願うばかりである。